

## 官ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷：印旛沼 周辺地域の概要理解のために

著者	小倉 淳一
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	61
ページ	55-68
発行年	2004-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10809">http://hdl.handle.net/10114/10809</a>

# 宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷

——印旛沼周辺地域の概要理解のために——

## はじめに

弥生時代中期後半の宮ノ台式土器は、その分布域内にいくつもの地域的な特色が存在することがわかっており、筆者もかつて東京湾東岸地域をとりあげて宮ノ台式土器の変遷過程について述べたことがある。<sup>(1)</sup>これはこの土器が器形や文様要素の上で共通した特徴をもちつつも南関東全体で一様な展開を見せるものではないことを前提としたうえで、千葉県域の東京湾側を対象範囲としてその時系列的な諸関係を整理することを意図したものであった。そこでは壺形土器にみられる縄文帯を中心とした文様の展開と調整技法の変遷に一定の方向性があり、それは房総半島を対象とした先行研究<sup>(2)</sup>との間に相違をみせるとともに、神奈川県

域における成果と多くの面で整合性の高いことを明らかにした。<sup>(3)</sup>

しかしながら、宮ノ台式土器の本質的な特色のひとつとされる櫛描文については深く言及しなかったこともあり、文様要素の分析が縄文に偏っているとの批判を受けたことも事実である。<sup>(4)</sup>筆者の対象とした地域においては縄文系統の文様要素がきわめて特徴的に顕在化していたため、わかりやすい要素から時間差を抽出してゆこうというのが本意であったが、他の要素についてはその後まとまった論考を出せずにいた。<sup>(5)</sup>

二〇〇三年になってから、地域的に出現する特徴的な文様要素として回転結節文を対象とした分析を行った際、<sup>(6)</sup>そろそろ宮ノ台式土器にとって地域的偏差の大きい要素から

小 倉 淳 一

通有な要素の展開に論を進めるべきであろうと考えるに至った。広域的な手がかりを地域的に整理することで、ごく狭い範囲にのみ有効である時系列関係を宮ノ台式土器全体の中により確実に位置づけ直すことができる筈である。

当初構想した枠組みが大きく揺らぐことはないにしても、当該地域における櫛描文の展開過程と特色をより明瞭にしておく必要がある。本論では与えられた紙幅の都合もあり、東京湾東岸地域のうち印旛沼周辺地域を主たる対象とし、その目的も櫛描文を施文する壺形土器の変遷の概略を提示することにとどめざるを得ないが、宮ノ台式土器の理解を進めるための基礎作業としておきたい。

なお、本稿で扱った資料の実見については、佐倉市教育委員会の猪股佳二氏、白井市教育委員会の高花宏行氏、印旛郡市文化財センターの酒井弘志氏にお世話になった。また、鈴木正博氏をはじめとする研究会「弥生道場」の諸氏にも検討の機会を与えていただいたほか、種々ご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

## 一 印旛沼周辺地域における櫛描文施文土器の姿

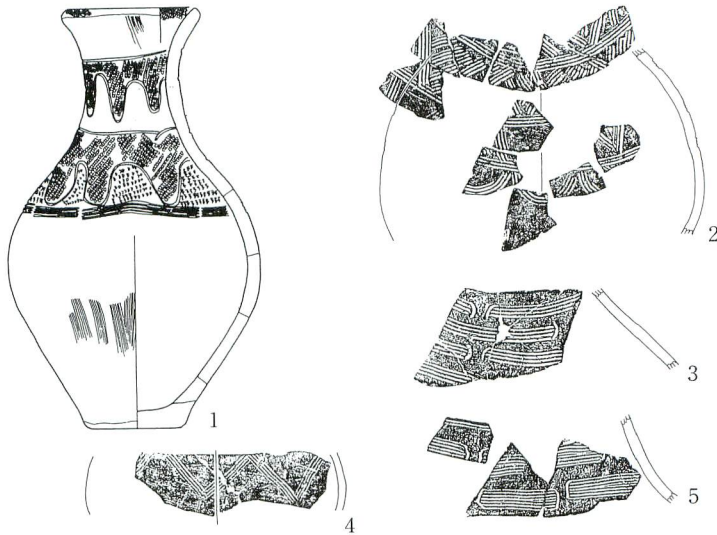
さて、印旛沼周辺地域では、宮ノ台式土器に伴う櫛描文施文土器の姿をどのようにあとづけることができるののだら

うか。筆者は以前当該期をETⅠ期からⅢ期の三期に大別しており、そのうちⅡ期をa・bに細別している<sup>⑦</sup>。本章ではその成果に従って土器に施文された櫛描文の姿を概観してみることしよう。

### 1 ETⅠ期

東京湾東岸地域における宮ノ台式土器と櫛描文の出現期と考えられる。胴部から頸部・口縁部にかけての幅広い範囲に斜縄文・沈線文・櫛描文・刺突文などを用いた文様を施すのが特徴となる時期である。前代の特徴である区画充填の要素から脱しきっておらず、宮ノ台式に通有の施文帯の横帯化はみられるものの、それに区画内刺突等が伴うものがある。

櫛描文の登場は、このⅠ期前半の基準資料とした千葉県安房郡三芳村仮家塚遺跡<sup>⑧</sup>の方形周溝墓出土土器（第1図1）の時期まで遡ることが明らかである。本稿で対象とする地域の資料ではないが、東京湾東岸地域全体の宮ノ台式土器の出現や時期区分に関わる事例であるので、敢えて触れておくことにする。該当資料は胴上部に施された斜縄文による舌状文帯の下端を横位の櫛描文によって区画し、囲まれた空間内に刺突文を施すものである。東京湾東岸地域



第1図 ET I 期に関連する主要な櫛描文施文土器（縮尺6分の1）

1：仮家塚遺跡 SZ 04（方形周溝墓） 2・3：大崎台遺跡第177号住居址 4・5：同第169号住居址

においては宮ノ台式土器の出現の当初から文様構成要素に櫛描文が加わっていることを示すもので、他地域との並行関係が注目される事例である。

今のところ印旛沼周辺地域では仮家塚遺跡例に並行する土器の発見例はない。しかし佐倉市大崎台遺跡<sup>9)</sup>では第一六九号・第一七七号住居址から出土した土器が仮家塚遺跡に続く時期の資料と想定できる。櫛描文を施す完形の壺形土器として復元されたものは共伴資料群中にはみられないものの、第一六九号住居址では南側に集中的に形成されたとみられる土器ブロック内を中心に、第一七七号住居址では炉跡付近を中心に櫛描文土器の破片が出土しており、関連を想定することができる（第1図2・5）。櫛描文系統の文様は擬流水文、胴部をめぐる山形文などのほかに、山形文・直線文・連弧文の三者が組み合うものもみられ、種類は比較的豊富である。図示していないが、第一六九号住居址では、胴上部から頸部にかけての広い範囲に文様を施し、なおかつ沈線による重四角文を加えたり、舌状文の外側に縄文を施す壺形土器が出土しており、これは後続する土器群には認めにくい特徴である。なお、第一七七号住居址出土の甕形土器には櫛描文手法による比較的整った横走羽状文が施される例が認められる。

## 2 ETⅡa期

本地域における宮ノ台式土器の本格的な展開期と考えられる。壺形土器の構成は、単純な斜縄文帯を胴上部に広く重ねるものを中心とし、器面調整は刷毛目調整痕を残すものが多い。櫛描文を施す壺形土器は比較の少ない。

ETⅡa期の基準資料とした大崎台遺跡第四三五号・第三四〇号住居址においては、共伴資料の中に櫛描文を施文する土器の存在は顕著ではない。いまひとつの基準資料である第二八八号住居址からは貯蔵穴内から櫛描文を有する土器が大型の破片として出土している（第2図1）。これを関連資料としてとりあげるならば、大崎台遺跡ではこの時期の数少ない櫛描文資料ということになる。胴上部に横位の櫛描文を多段にわたって施文し、最下端に同一工具による波状文をめぐらせる。この幅広の櫛描文帯に縦方向の沈線を加え、器面を分割している。<sup>(10)</sup>また、第二八八号住居址からは広口壺形土器ではあるが、三本一単位の櫛描文による擬流水文が六段にわたって施される赤彩の資料が出土している（第2図2）。

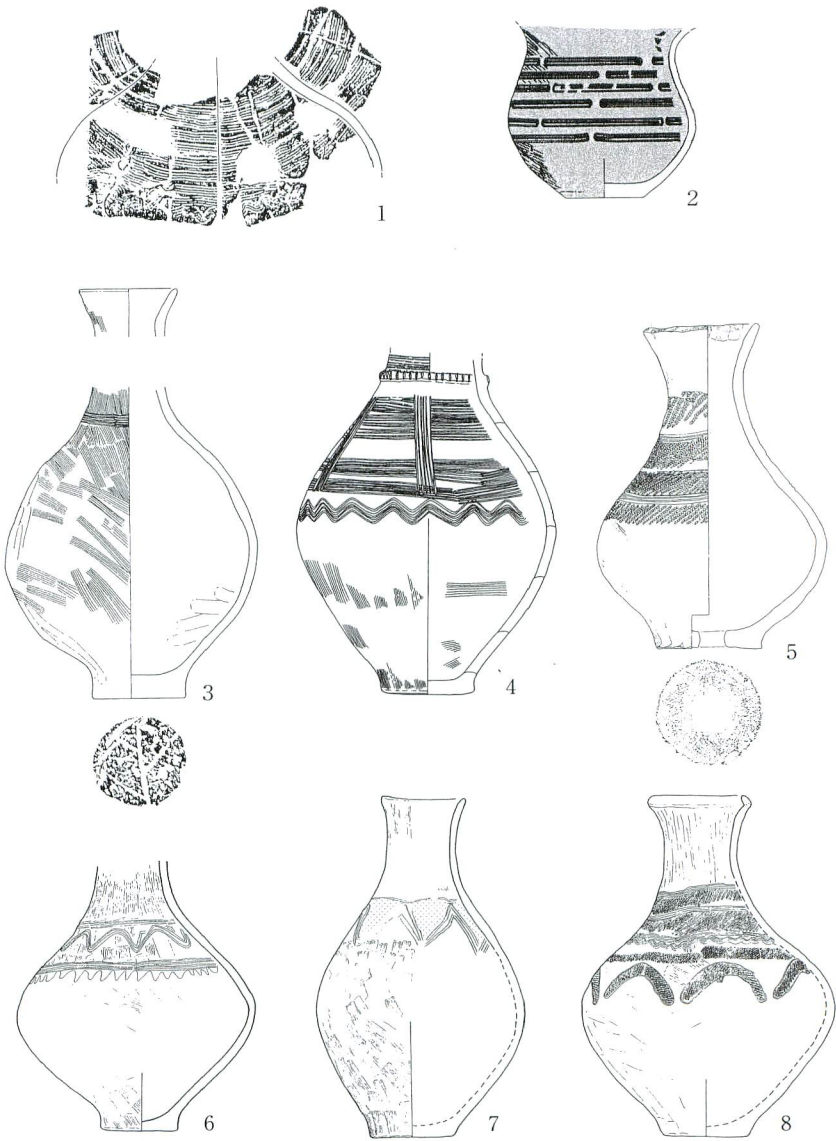
大崎台遺跡ではこれに関連する個別の資料がいくつか存在する。第二七三号住居址の土器（第2図3）は刷毛目調整を主体とするが、頸部に六本一単位の櫛描文が一条めぐ

るものである。第一号方形周溝墓出土土器（第2図4）は頸部に刻目をもつ突帯を付し、刷毛目調整主体で胴上部から頸部にかけて広く櫛描文が展開する。頸部上半を欠いているため突帯直上の文様は横位の櫛描文以外は不明であるが、胴上部には二条ないし三条の櫛描文を間隔をあけて二段にわたって施文し、縦位の櫛描文で器面を分割する。これらの文様の下端に櫛描波状文をめぐらせる。

これらETⅡa期に相当する資料として佐倉市太田用替遺跡七号住居址出土資料がある。この遺跡は大崎台遺跡から西に谷を挟んだ寺崎向原遺跡<sup>(12)</sup>の乗る舌状台地基部に所在しており、近年発掘調査された資料の中できわめて一括性の高いものである。横方向に展開する斜縄文帯、結紐文帯、山形文帯、舌状文帯などの縄文系の文様が器面に広く展開する壺形土器を主体としており、ヘラミガキ調整を加えるものも一定量見られるものの、刷毛目調整をよく残す土器が多数を占め、総体としてはETⅡa期に位置づけることが可能と考えている。

第2図6は櫛描波状文帯の上下を横位の櫛描文帯で区画している。頸部には刷毛目調整痕がよく残る。同図7は二本一単位の櫛歯状工具で頸部下端に一带の沈線を施文し、同じ工具で直下に山形文帯を施文する。櫛描文で囲まれた

宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷（小倉）



第2図 ET II a 期に関連する主要な櫛描文施文土器（縮尺6分の1）  
1・2：大崎台遺跡第288号住居址 3：同第273号住居址 4：同第1号方形周溝墓  
5：六崎貴船台遺跡004（方形周溝墓） 6～8：太田用替遺跡7号住居址

部分は赤彩している。口縁部から頸部にかけては縦方向の刷毛目調整とナデ調整、胴部は刷毛目調整が顕著で、一部にLR縄文とみられる圧痕がみられるが、施文帯となるものではない。籠目の残る土器である。同図8は二段の縄文帯を三条の櫛描文で区画し、下に櫛描波状文を沿わせる。さらに下に横走する縄文帯と連弧状の縄文が付加される。胴部は刷毛目調整とヘラミガキ調整を併用している。

また、佐倉市六崎に所在し、大崎台遺跡にほど近い六崎貴舟台遺跡からも関連資料が出土している(第2図5)。○四方形周溝墓出土のもので、胴上部に広く施文される斜縄文帯の区画文として三条一単位の櫛描文が四条加えらるものである。四条のうち中の二条はかなり不鮮明になっている。器面には刷毛目調整痕が残されており、ETⅡa期に位置づけることが妥当であろう。

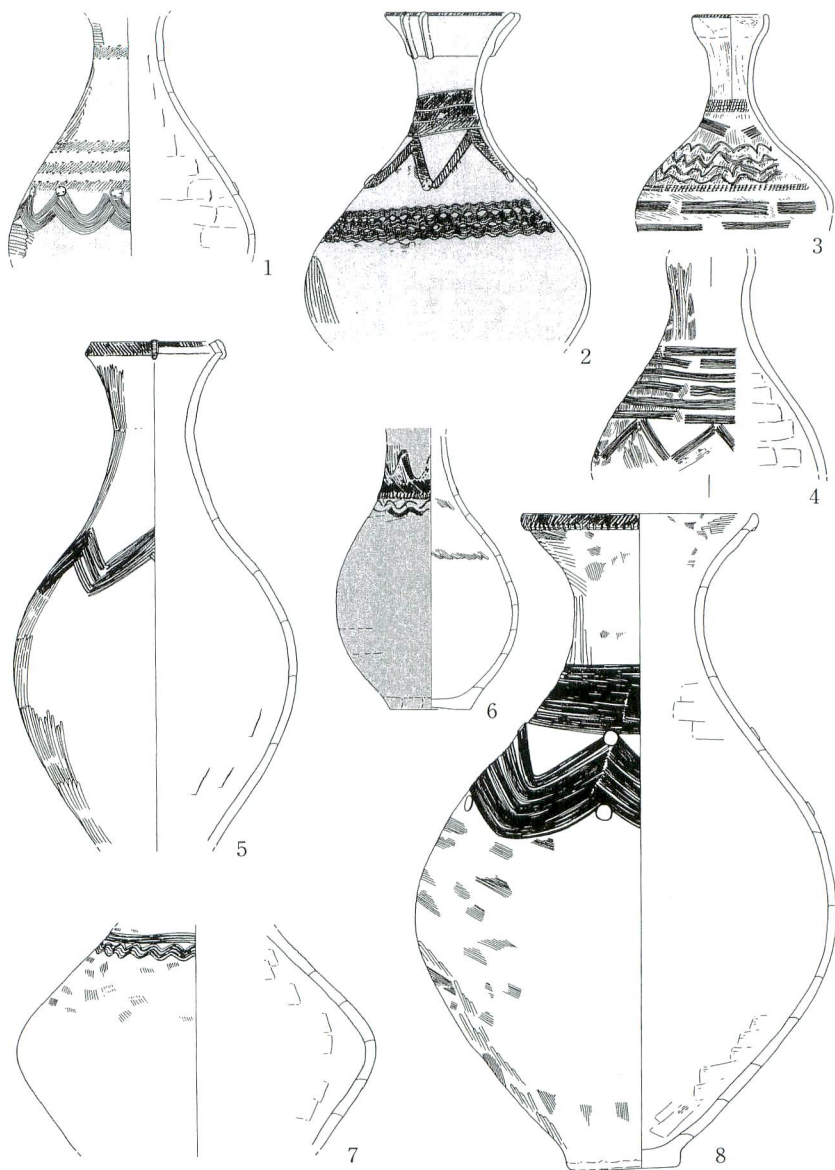
### 3 ETⅡb期

この時期の壺形土器は文様構成の上ではⅡa期に準じるものの、器面調整において刷毛目調整痕をヘラナデやヘラミガキといった調整技法で消去するものが多いことが特徴としてあげられる。また、回転結節文が一般化し、後半には羽状縄文の導入も図られる。

ETⅡb期は大崎台遺跡第一四四号住居・第二七〇号住居出土資料を基準資料としている。第一四四号住居からは四本一単位の工具による櫛描文を三段に重ねて連弧文を描く(第3図1)。この文様は胴部に三段にわたって施された刺突列を伴う斜縄文帯の下端に付加され、縄文帯との接点には円形浮文を加える。同住居址からは、ほぼ同一の構成を取る壺形土器がもう一個体出土しており、櫛描横走羽状文をもつ甕形土器も多数みられる。

第二七〇号住居址からも櫛描文をもつ壺形土器が出土している(第3図6)。頸部に形成された段部の上下に三本一単位の櫛描波状文を加えるが、ナデ調整によってかなり消去されている。それ以外の完形土器類には櫛描文は施されない。

大崎台遺跡におけるこの時期の関連資料としては、まず第一六二号住居址出土資料(第3図2)が挙げられる。ヘラミガキ調整を主体とする赤彩土器で、頸部から胴上部にかけて斜縄文帯をめぐらせ、円形浮文を末端に付加する結紐文を加える。以下にやや間隔を開けて六本一単位の櫛描波状文を三段にわたって施文している。共伴資料には斜縄文構成でヘラミガキ調整を全面に施す壺形土器もあり、ETⅡb期の良好な資料である。



第3図 ETⅡb期・Ⅲ期に関連する主要な櫛描文施文土器（縮尺6分の1）

1：大崎台遺跡第144号住居址 2：同第162号住居址 3：同第7号方形周溝墓 4：同環濠  
5：同第378号住居址 6：同第270号住居址 7：同第408号住居址 8：同第209号住居址



環濠内の廃棄ブロックからこの時期の資料が出土している(第3図4)。Lブロックとされる集中地点から出土したもので、本来多段に施される擬流水文の区画を失った形で櫛描文だけが施される例である。下端には結紐文とも山形文とも見える櫛描文がめぐるが、これは縄文系の文様において最下段の横帯文とともに縄文帯による結紐文ないし山形文の構成をとるものが多くみられることから、これから縄文がすべて櫛描文へ転写された姿とみることも可能である。ただし、櫛描結紐文が最下段にめぐる土器は相模地域にも存在するので、即断はできない。調整は刷毛目調整のちヘラミガキ調整で、ETⅡb期以降の特徴をよく備えている。類似した文様構成をもつ壺形土器は第七号方形周溝墓S溝からも出土している(第3図3)。口縁部から頸部にかけては刷毛目調整をよく残し、胴中部には粗い刷毛目調整のち丁寧なナデ調整を加えている。調整の程度ではETⅡa期にさかのぼる可能性もあるが、胴部下半が残存していないため、文様部分を除いた調整の状態が明瞭ではない。胴上部に粗い櫛描波状文を二段にわたって施しているほか、櫛描文系の文様では頸部直下と胴中部に横位の櫛描文を施文している。これも擬流水文の配置そのままに置かれていたものの、文様単位の端部区画を省略したもので

ある。両者ともに擬流水文がかなり退化した例といえるだろう。

また、大崎台遺跡第三七八号住居址出土資料(第3図5)もETⅡb期以降の資料とみられる。密に施されるヘラミガキ調整が特徴的である。口縁部がLR単節斜縄文で羽状構成をとらないが、これはⅢ期のものにも多く認められる。胴上部に四本一単位の櫛描文を三段に重ねて山形文を施文している。大崎台第四〇八号住居址出土資料(第3図7)も刷毛目調整後にヘラナデ調整を加え、胴上部に四本一単位の工具による横位櫛描文帯と波状櫛描文帯を施文しており、この時期に位置づけられよう。

#### 4 ETⅢ期

ETⅢ期は縄文帯が斜縄文から羽状縄文へと大きく変化し、かつⅡb期と同様に刷毛目調整をヘラナデあるいはヘラミガキ調整で消去するものが一般的な時期であり、この時期をもって宮ノ台式土器の時期は終わる。

この時期の基準資料とした大崎台遺跡第四三一号住居址の共存資料中には、櫛描文を構成要素とする壺形土器は存在しておらず、当該期の壺形土器に施される櫛描文土器がⅡ期より更に少なくなる可能性を示唆している。

この時期に関連する大崎台遺跡の資料は、第二〇九号住居址出土土器（第3図8）があげられる。器高五一・六センチメートルを測る大型壺形土器であり、刷毛目調整ののち丁寧なヘラミガキ調整が行われている。有段状の口縁部にはLR縄文が施され、下端を刻む。胴上部に六本一単位の工具によって六段の横位櫛描文を重ね、その下に同一の工具による五段重ねの連弧文を施す。連弧文の接続部には上下に円形浮文を貼付している。この住居址からは羽状縄文帯を有する完形の小型壺形土器や、胴上部に複数の羽状縄文帯を有する大型壺形土器の大型破片などが共伴出土しており、櫛描文による横走羽縄文構成の甕形土器もみられる。

## 二 印旛沼周辺地域における櫛描文施文土器の特徴

印旛沼周辺地域にみる櫛描文を施す壺形土器の特徴は以下の三点程度にまとめられよう。

第一に、櫛描文を施文する土器の数は総体として少ないことが挙げられる。大崎台遺跡では一五〇軒以上の堅穴住居址と環濠が検出され、きわめて多くの遺物が出土しているにもかかわらず、完形土器として図示できる資料は非常に少ない。近隣に所在し、本稿でETⅡa期に位置づけた太

田用替遺跡七号住居址<sup>(15)</sup>からも同様に、全体で一八ないし一九点の壺形土器がまとまって発見されているにもかかわらず、櫛描文を施文する土器はわずか三点のみの出土で、残りのうち九点は縄文を施文し、そのうち一点は櫛描文・縄文を併用するもの、その他は無文のものである。大崎台遺跡の傾向と合わせて理解しても、やはり印旛沼周辺地域においては櫛描文を施文する土器の例数はかなり少ないことがわかる。

第二に、櫛描文を施す土器には東京湾東岸地域に特徴的な文様要素や手法との関連が認められる。この地域では、伝統的に施文幅を広くとる傾向が強く、宮ノ台式土器に関しても、すべての時期を通じて頸部から胴上部にかけての広い範囲に密度の高い文様が施されるものが認められる<sup>(16)</sup>。これは、時期が降るに従って壺形土器の文様が頸部に縮約してゆく傾向のある神奈川県域<sup>(17)</sup>とは対照的である。

しかし、その文様自体は複雑な構成のまま維持されることはなく、次第に単純なものへと変化してゆく。これは文様単位を重ねて幅広の施文帯を構成する手法が一般化してゆくことによるもので、縄文帯や回転結節文帯がたどる方向性である。櫛描文もそれらの影響を受けて、横方向に施される単一の横帯を幅広く重ねてゆき、単純な文様構成を

指向するようになる。幅広い施文範囲が維持される一方で、構成の複雑さ自体は退行してゆくのである。かくして連弧文なども極端に幅の広いものが出現するようになる。<sup>19)</sup>

また、東京湾東岸地域においては、回転結節文の文様構成と櫛描文のそれとの間に一定の関連がある。両者とも連弧文などの文様をかたちづくる場合、それが円形浮文と結びつく傾向が強い。ただし、回転結節文が幅広いの施文帯を構成するほかに羽状縄文帯の区画文としても特徴的に用いられてゆくのに対して、ETⅡb期以降の櫛描文にはその傾向が弱い。櫛描文は当初から区画文としての性格をもっていたが、時期が降るに従って縄文と同様の使われ方をされるようになる、区画文的な性格を減じてゆくものとみられる。このことは羽状縄文帯の区画文を検討してみれば明らかであり、一九九六年に調査した際には東京湾東岸地域全体でも、ETⅢ期に特徴的な羽状縄文の区画文として櫛描文が用いられている例は八四例中三例のみで、全体として著しく少ないことがわかる。大崎台遺跡において、羽状縄文を二本一単位の工具で区画する例はあるが、これも多いとは言えない。区画文の役割は主として沈線文や回転結節文が特徴的に担うよう変化してゆくのであろう。

そして第三に、櫛描文自体が宮ノ台式土器の終末まで存

続することが挙げられる。宮ノ台式期最終末の下末吉台地においては「一部に櫛描文が残存するが（中略）例外的な存在と考えてよい」と<sup>20)</sup>とされている。しかし、この地域では文様単位を重ねて幅広いの施文帯を構成する手法が一般化することによって、櫛描文は羽状縄文帯や回転結節文帯とともにETⅢ期まで残存するものとみられる。

また、今回はあまり触れなかったが、壺形土器についても横走羽状文が形を崩しながらETⅢ期まで存続することは明らかである。これも櫛描文が文様要素として最終期に残ることを補強する事実であらう。

### 三 櫛描文施文土器の展開過程

上記の動向や特質をふまえたうえで、櫛描文からみた印旛沼周辺地域における宮ノ台式土器の姿を、東京湾東岸地域の時間軸に沿って整理することにしよう。

I期 縄文帯や刺突充填文の区画要素として、櫛描文が壺形土器の文様構成に参画してくる時期である。やや遅れて、大崎台遺跡の初期となる時期には、櫛描文のみの文様構成をとるものもみられる。山形文、擬流水文、重三角文、連弧文などの意匠文のほか、区画文としても用いられる。櫛描文の当初からの特性として、横帯化の傾向が強く

みられることが挙げられるが、斜縄文系統の文様もその影響を強く受けはじめていることがわかる。

Ⅱa期 横帯化した施文帯の構成要素として、櫛描文が他の文様要素と結びつきながら器面を飾る時期である。山形文、擬流水文、波状文など、櫛描文の一般的な要素が明確に認められるほか、頸部に一条の横帯を単純に施すだけのものもみられる。また、櫛描横帯を多段に密に重ねた太い施文帯を形成し、それを縦位の沈線や櫛描沈線で分割するものも存在する。これは東海地方の白岩式等との関連が想起されるものである。斜縄文帯と櫛描文との関係も親密で、斜縄文帯の区画要素として盛んに用いられるようである。

Ⅱb期 前代のものに比べて文様の退化傾向が強まり、単純な構成をとるものが増える。また、櫛描沈線を多段に密に重ねた太い施文帯が増加する。Ⅱa期には櫛描横帯のものが多かったが、この時期には波状文、連弧文、山形文などのモチーフをとるものも増加する。一方、擬流水文は区画沈線が省略され、切れ切れの櫛描沈線が当初の構成を保ったまま器面に配置されるようになる。また、斜縄文帯の区画要素となる例は減少するようである。

Ⅲ期 櫛描沈線を多段に密に重ねた太い施文帯が残り、壺

形土器の器面を広く飾るものがある。羽状縄文帯や回転結節文帯の動向に連動すると考えられ、円形浮文が付加される例もある。ただしこの場合他の文様で区画する例はほとんどない。また、回転結節文帯の動向とは異なり、羽状縄文帯の区画文として櫛描文が用いられる例は少ない。この時期をもつて宮ノ台式土器は終焉を迎えるが、数量的には少ないながらも櫛描文は最後まで残存し、甕形土器の櫛描横走羽状文としても残されている。印旛沼周辺地域の特徴といえよう。

#### おわりに

以上、雑駁ではあるが、印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器にみられる櫛描文の動向を追ってみた。宮ノ台式土器独自の文様とされる縄文を用いた資料に比べて、当該地域において櫛描文を施す壺形土器の発見例はさほど多くはない。しかし櫛描文もまた羽状縄文帯や回転結節文帯の動向と連動しながら変化してゆく状況はある程度追ってゆくことができた。また、擬流水文の退化現象や施文帯としての使われ方の変化などもおさえることができた。本稿では東京湾東岸域における、さらに狭い範囲での変遷の一端を明らかにしたにすぎないが、宮ノ台式土器の分布範囲でこうした

変化が共通して現れるか否かは興味深いところである。

しかしながら、ここでは簡単な分析を行っただけであり、残された課題は非常に多い。第一に、大崎台遺跡第二八八号住居址でみられたように(第2図1)、他地域特に東海地方東部との深い関係を示す可能性のある土器の存在が挙げられるが、これについては詳細な分析をすることができなかった。印旛沼周辺地域を広域的な関係の中に位置づけてゆくためにも必要な作業が残されたことになる。第二に、筆者のETⅠ期とした資料の年代観が、他の検討事例と一致しないことが挙げられる。特に安藤広道の見解との相違は、大崎台遺跡の開始年代に関わっており、これは南関東地方における環濠集落の出現時期に関する認識の差をもたらす。筆者も大崎台だけが古い時期から営まれるとは到底思えないが、はたして宮ノ台式期の環濠をもつ集落は南関東地方一円で一齐に始まるのかどうか、いまだ検討したいところではある。そして第三に、東関東系統の土器、東北地方の土器との関連については触れることができなかった。これは筆者の力量不足によるものではあるが、利根川周辺域を中心とする資料の蓄積と検討によっていずれは克服してゆきたいと考えている。

## 註

- (1) 小倉淳一「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」〔史館〕第27号 史館同人 一九九六年
- (2) 斎木 勝「第四章 東京湾東岸における中期弥生遺跡の集落構成と出土土器」〔研究紀要3―考古学からみた房総文化― 3 弥生時代〕財団法人千葉県文化財センター 一九七八年、柿沼修平「大崎台遺跡の弥生式土器―とくに中期後半から後期初頭にかけての弥生式土器について―」〔奈和 15周年記念論文集 奈和同人会 一九八四年、斎木 勝「1・宮ノ台式土器」〔弥生文化の研究〕<sup>4</sup> 雄山閣出版 一九八七年、柿沼修平「大崎台遺跡の研究Ⅱ」〔弥生時代中期後半の集落〕<sup>(1)</sup>〔奈和〕第33号 奈和同人会 一九九一年
- (3) 石井 寛「調査の成果と課題」〔折本西原遺跡〕横浜市埋蔵文化財調査委員会 一九八〇年、安藤広道「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分(上)(下)」〔古代文化〕第42巻第6号・第7号 古代学協会 一九九〇年
- (4) 黒沢 浩「房総宮ノ台式土器考―房総における宮ノ台式土器の枠組み―」〔史館〕第29号 史館同人 一九九七年
- (5) 筆者の論考(前掲註1)と時期を同じくして安藤広道は南関東地方における中期後半の弥生土器編年の大枠を論じており、筆者が東京湾東岸地域とした範囲においては市原台地(Ic)地域、印旛沼周辺(In)地域の宮ノ台式土器変

遷案を提示している。わずかに二頁の記述ではあるが、下末吉台地周辺との並行関係に言及したものである。重要である。しかし、筆者の並行関係試案とは一致していない。今後東京湾東岸地域における宮ノ台式土器の文様の諸要素をより深くかつ総合的に論じる必要があることは明らかであり、当該地域における宮ノ台式土器の開始の問題についても南関東地方における諸関係から考えてゆかねばならない。

安藤広道「南関東地方（中期後半・後期）」（『YAY! 弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』 弥生土器を語る会）一九九六年

(6) 小倉淳一「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」〔『法政考古学』第30集記念論文集 法政考古学会〕二〇〇三年

(7) 小倉淳一「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」（前掲註1）

(8) 大淵淳志・小川和博「安房坂家塚・房総半島最南端弥生時代中期の方形周溝墓の調査」三芳村教育委員会 一九九四年

(9) 柿沼修平ほか「大崎台遺跡発掘調査報告書」Ⅰ 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 一九八五年、柿沼修平ほか「大崎台遺跡発掘調査報告書」Ⅱ 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 一九八六年、柿沼修平ほか「大崎台遺跡発掘調査報告書」Ⅲ 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 一九八七年、柿沼修平・高橋 誠「大崎台遺跡発掘調査報告書」Ⅳ 佐

宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷（小倉）

倉市教育委員会 一九九七年

(10) こうした文様構成をもつ土器は東海地方東部に分布する白岩式土器の影響下にあるとも考えられ、興味深い。

佐藤由紀男・篠原和太・萩野谷正宏「東遠江地域」（『弥生土器の様式と編年』木耳社）二〇〇二年、萩野谷正宏「白岩式土器」の再検討」（『転機』第七号）二〇〇〇年

(11) 大槻恵理香・宮 文子「佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 平成9年度 太田用替遺跡」佐倉市教育委員会 一九九六年

(12) 渋谷興平ほか「寺崎遺跡群発掘調査報告書」佐倉市寺崎遺跡群調査会・佐倉市教育委員会 一九八七年

(13) 大澤 孝編「千葉県佐倉市六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書 六崎貴舟地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第28集」財団法人印旛郡市文化財センター 一九九一年

(14) 谷津遺跡（小田原遺跡）出土土器の中に櫛描横帯文を五段に重ね、最下段を櫛描結紐文帯とする例がある。櫛描文が結紐文帯のモチーフの影響を受けた例としてよいかもしれない。しかし、この構成が擬流水文帯をもつ壺形土器との関係にも適用できるかどうかは議論の余地がある。なお、大島慎一は当該土器を相模Ⅳ―2様式に位置づけている。

小林行雄・杉原莊介編「弥生式土器集成本編」一九六四年、伊丹 徹・大島慎一・立花 実「6 相模地域」（『弥

生土器の様式と編年」東海編 木耳社）二〇〇二年

- (15) 大槻恵理香・宮 文子『佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 平成9年度 太田用替遺跡』（前掲註11）

- (16) 小倉淳一「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」（前掲註1）

- (17) 安藤広道「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）（下）」（前掲註3）

- (18) この傾向は東京湾東岸地域全体に視点を拡大しても、他の遺跡で確認できる。たとえば袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡040遺構北側床面一括出土土器には櫛描文を七段程度重ね、円形浮文を加えた連弧文帯とも波状文帯ともみえる文様をもつ壺形土器が出土している。

小高春雄ほか『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群 千葉県文化財センター調査報告書第232集』

- (19) 小倉淳一「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」（前掲註1）

- (20) 安藤広道「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）（下）」（前掲註3）

- (21) 安藤広道「南関東地方（中期後半・後期）」（前掲註5）

（付記）伊藤玄三先生には十三年間の学生時代を通じてご指導いただいた。先生は日頃、頭ごなしに「こうしなければならぬ」「かくあらねばならない」とおっしゃることはなかった。しかし「こうしたい」「かくありたい」という意欲は常に学生達に示しておられた。だから私達は先生のお気持ちを自分達の希望と重ね合わせることができ、それ故

に自分の力で考えることも大切にできたのではないかとと思う。第一校舎四階の研究室で、先生のご指導の下に資料整理を続けた頃を懐かしく思い出しつつ、これからの先生の益々のご健勝とご活躍を祈念する次第である。